
SIREN : Extinct

北脇 善朗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

SIREN:Extinct

【Nコード】

N5765F

【作者名】

北脇 善朗

【あらすじ】

プレイステーション2で発売されたSIRENを下敷きにした小説です。一応続編的な内容です。

プロローグ

プロローグ

内陸に位置し、三方を山々に囲まれた羽生蛇村。

2003年8月2日。未曾有の土砂災害によって生存者1名という大災害が起こり、隣町の三隅町に合併され廃村となった・・・

2030年。バブル以来の好景気に沸く日本。不毛の地となった旧羽生蛇村にも開発の手が伸びていた。

先行して完成した宿泊施設のこけら落としに地元の新三隅西高校2年生が選ばれ急遽夏休みなのに宿泊学習がスケジュールに組み込まれた。

0:00 赤い光からサイレンが鳴り響き村が闇に包まれていく。

村は寸断され、空は赤黒い雲に覆われていた。恐怖と混乱の中、人々は新たな世界を創造しようとするモノの存在を知る。

闇から響くサイレンに誘われ、人は屍人になる

人々は、精神的にも状況的にも追い詰められ、一人また一人とその数を減じていく。

サイレンに誘われ、人でなくなった者たちは、やがて新たな世界を創造し、人間社会を蝕もうとしはじめる。すり替わっていく。人が屍人に。世界が屍人の世界に。

深い闇にとざされ新たな創造の世界と化した村で、絶望的な戦

いが始まる。

前日 21:14:48 堀内 勇樹 宿舎/食堂

前日 21:14:48 堀内 勇樹 宿舎/食堂

レクリエーションでビンゴゲームを楽しむ生徒達

幼馴染みの『四方田 夏美』に話しかける堀内

堀内 「ちよつといい？」

夏美 「え！？うん、いいよ。何？」

堀内 「え〜と、その〜・・・今リーチだろ？何番？」

夏美 「38番だよ、後4人で景品なくなっちゃうね。」

夏美の隣にいた友達の『井上 葵』が

井上 「結衣もリーチみたいだし私見てくるね」

井上が『酒田 結衣』の所へ行くのを見て

堀内 「あのさ、今日、いや明日・・・」

夏美 「どうしたの？何かあった？なんか変」

堀内 「あ、え〜、う〜ん。」

司会 「38番!！」

夏美 「あ!ビンゴ!！」

景品を取りに行く夏美、一人になった堀内に井上が戻ってきて声をかける

井上 「どうだった?言えた？」

堀内 「それが・・・」

井上 「えっ!言っていないの?男なんだからしつかりなさいよ!今が絶対チャンスなんだから。剣道みたいに一本取る気持ちで言いなさいよ。あつ、夏美が帰ってくる。ちゃんと言いなよ!」

井上は酒田の所へ戻っていく。

入れ替わるように夏美が笑顔で景品をもって帰ってくる。

夏美 「へへ、当たっちゃった。何入ってたんだろ？」

堀内 「あのさ、さっきのことだけど。」

夏美 「そうだった、何何??」

堀内 「夜2人で話せないかな?11時半くらいなら先生も見回りに来ないだろうし」

夏美 「うん、別にいいけど」

堀内 「じゃあ1時半頃に北ベランダで」

夏に 「わかった」

夏美は少し照れたようにうなずいた。

司会 「景品がなくなったのでビンゴゲームを終了します。」

いつのまにかビンゴゲームも終わっていた。

先生 「以上でレクリエーションは終わり。各自部屋に戻って就寝準備をして速やかに寝ること。夜更かしするなよ」

各自部屋に戻っていく、堀内に井上が話しかけてきた。

井上 「ねえねえ、ちゃんと夏美に言えたの？」

堀内 「ああ、なんとか言えたよ。」

井上 「ふ〜ん。よかったじゃん！がんばってね」

といい井上は自分の部屋に入っていた。

前日 23:42:54 堀内 勇樹 宿舎/2F北ベランダ

前日 23:42:54 堀内 勇樹 宿舎/2F北ベランダ

2F北ベランダで夏美が来るのを待っている堀内、その手には何か
が握りしめられている。

堀内 「あゝ遅いな。寝ちゃったのかな」

就寝時間から2時間以上も経っているので少し不安になった。

数分後・・・

夏美 「ごめん！待った？」

堀内 「いや、大丈夫だよ。全然平気」

夏美 「みんなと話してて、トイレに行くって言って抜けてきた。」

堀内 「まだみんな起きているんだ？」

夏美 「女子は話すと長いからね。」

堀内 「そうなんだ、何時間でもいけそうだね」

夏美 「死ぬまで話せるかも。それより何か話あるの？」

堀内 「ああ、そう、うん。話というか・・・ちょっと渡したい物があって、明日ナツの誕生日だろ。一番にお祝いしたくてこの時間に待ち合わせをしたんだ。」

夏美 「え、なにそれ、なんか恥ずかしいね」

堀内 「そんなにたいしたものじゃないよ、気に入ってくれればいいけど」

堀内は握りしめている手を夏美に差し出す。

夏美が受け取ろうとしたその時・・・

初日 00:00:00 堀内 勇樹 宿舎/2F北ベランダ

赤い光が二人を照らす。

堀内 「うわ！なんなんだ？この光は？」

夏美 「きゃあ！」

いきなり現れた赤い光は宿舎の西側へ落ちて行った。

堀内 「あの光は一体・・・」

夏美 「何の光？怖いよ。」

堀内 「見てくる、夏は部屋に……」

『ウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウ~~~~~』

サイレンのような轟音が鳴り響く。音と共に激しい頭痛が二人を襲う。

堀内 「な、なんだ!?この音は、あ、頭が割れそうだ……」

夏美 「い、痛い……」

サイレンの音が鳴り響く中、二人の意識はなくなっていく。

初日 00:28:26 堀内 勇樹 宿舎/2F北ベランダ

初日 00:28:26 堀内 勇樹 宿舎/2F北ベランダ

サイレンの轟音と激しい頭痛で気を失っている堀内と夏美、堀内が目を覚ます。

堀内 「う、ううん。」

傍らには夏美が気を失って倒れている。

堀内 「ナツ！おい！大丈夫か？」

夏美の体をゆする。

夏美 「う……ううん……」

夏美の目が薄らと開く。

ホッと安心する堀内。また頭痛が込み上げてくる。何かの映像が脳内に映し出される。

堀内 「うわっ！！なんだ？今のは？これは、いったい？」

先ほどと同じように目をつむり意識を集中させる、また同じように脳内に映像が映し出された。

堀内 「これは、透視？いや違う、誰かの視界？」

脳内の映像を見ていると、誰かが階段を昇る映像が映り込んできた。目を開け廊下を覗き込むと階段を昇る足音がする。

堀内 「やはり、現実の映像なのか？」

考えているうちに足音は階段を上がりきり、後ろ姿が見える。

堀内 「あの姿は、『関口』先生。みんなが無事か見に来てくれたのか」

ベランダのドアを開け関口に近づく。

堀内 「関口先生！あの音は？いったい何があったんですか？」

後ろ姿の関口に声をかける。

驚いたように肩を萎縮させ振り向く。関口の姿を見て様子が変わるとに堀内は驚いた。

堀内 「関口・・・先生？・・・ど、どうしたんですか？何が・・・」

言葉が詰まる。関口の顔は青白くなり、白いシャツには血のようなもので真っ赤になっていた。

関口 「部屋に・・・戻りな・・・さ・・・い・・・」

堀内 「え！？なんて・・・？」

関口 「規則・違反・者は・・・誰だ！！！！うおおおお！！！！」

関口は雄叫びのような声をあげ、目や口から血のような液体が流れ出る。

堀内 「うわあああ！！！！」

堀内が悲鳴をあげるのと同時に関口が掴みかかってきた。

必死に抵抗するがものすごい力だ。堀内も剣道で鍛えているので大人には負けにくいぐらいの力はある。

だが関口の力は人間とは思えない位力が強い。

しばらく掴み合っていたが壁に押さえつけられてしまった。

堀内 「うお・・・！！くっ！！」

夏美 「きゃあああああ！！！！」

気を失っていた夏美が目を覚まし、堀内と血まみれの関口を見て悲鳴をあげた。

すると悲鳴に反応したのか関口は堀内を放し夏美の方へ向かって行く。

堀内 「ナツ！！逃げる！！先生がおかしい！！！！」

しかし夏美はその場で腰を抜かしてしまう。

関口 「部屋に……戻りなさい」

堀内が関口に掴みかかる。関口は堀内を引きずったまま夏美に近づく。

206号室のドアが開き『酒田 結衣』が顔を覗かせた。

酒田 「どうしたの？何の騒ぎ？……きゃあああああ……！！！！」

ドアを開けた目の前で血まみれの関口がいた。

ドアと悲鳴に反応した関口はしがみつくと堀内を振り払い酒田の方に向かう。

堀内 「ドアを閉める……早く……！！」

間一髪でドアを閉めた。内鍵もかけたらしく、関口はドアノブを必死にこじ開けようとしている。

堀内はすぐさま腰を抜かしている夏美に駆け寄った。

堀内 「ナツ！大丈夫か？逃げよう、立てるか？」

夏美 「うん、ユウ君……あれって？」

夏美が廊下を指さす。振り返って指さす方を見ると、関口の向こうにもう一人の人影が見えた。

堀内 「あれは？『巻』先生？」

存在に気づくと同時にその人影はこっちに向かってくる。

夏美 「いやああああ！」

悲鳴をあげてまた腰を抜かす。堀内は倒れないように抱き支える。

巻の手にはナイフのようなものを持っており関口と同じように目や口から血が溢れている。

巻 「楽園を・・・作る・・・ヒャッハッハア」

ドアを開けようとしている関口を通り越して二人のいるベランダへ近づいてきた。

すぐさまベランダのドアを閉めるが鍵は外側にないので体をドアに密着させて開かないように力を込める。

ガン！ガン！ドアに体当たりをする巻、すごい力でドアが開きそうになる。

堀内 「駄目だ！ナツ！逃げるんだ！」

夏美 「逃げるって、ここ2階だし階段もないよ」

堀内 「最悪飛び降りるしか・・・」

ベランダを見渡すとすぐ横に木があることに気づく。

堀内 「その木に飛び移れないか？枝でもいい」

夏美 「なんとか行けそうかも・・・」

堀内 「もう耐えられない、早く！！！」

夏美はベランダの欄干をよじ登って木に飛び移る。ガサガサガサ、ドサ！枝がしなつて地面に落ちる。

堀内 「ナツ！大丈夫か？」

夏美 「うん！大丈夫！ユウ君も早く」

堀内もすぐさま欄干をまたぎ木に飛び移った。

支えがないドアに体当たりをした巻はそのままベランダの欄干に頭をぶつけ倒れ込んだ。

木から飛び降り夏美と合流する。

堀内 「怪我しなかったか？」

夏美 「うん、大丈夫だよ」

そう言いながらも足を引きずっている。

堀内 「落ちた時痛めたんだな、とりあえずここを離れよう」

夏美を支えて宿舎を離れた。

前日 23:28:52 巻 文夫 宿舎/101号室

前日 23:28:52 巻 文夫 宿舎/101号室

机いっばいに写真が並べられている。すべて副担任の『宮坂 真由美』が映っている。

一枚の写真を手に取り

巻 「この日が来るのを待っていたんだよ、真由美。フッフ・」

コン、コン。誰かがドアをノックする。

巻 「はい」

ドアを開けると関口が立っていた。

関口 「最後の見回りが終わりました。では明日早いので、お休みなさい」

巻 「お疲れ様です。お休みなさい」

関口が自分の部屋に入るのを確認すると、カバンからナイフとビデオ紐とビデオカメラを取り出し部屋を出た。

向かったのは103号室。宮坂の部屋だ。

鍵を開け部屋に入る。

引率の教師3名には、宿舎離れと倉庫以外の部屋を開けられる鍵を渡されている。

すぐさまビデオカメラを部屋にセットする。

カメラをセットし終わった巻はクローゼットに身を潜めた。

宮坂は風呂に入っている。

職員のスケジュールは巻が管理しているので2人の行動は巻のスケジュール通りに進んでいた。

巻 「さあ、そろそろ風呂から帰ってくる頃かな」

しばらくしてドアを開ける音がする。

宮坂が部屋に入ってきた。

風呂あがりの宮坂を見てゴクリと唾を飲む。

宮坂は髪をといたりクリームを塗ったりして寝る準備をしている。

明日のスケジュール表を一通り確認すると

宮坂 「さてと・・・」

部屋の明かりを消し卓上ランプの明かりだけになった。

巻 「そろそろだな」

手にナイフとビニール紐を握りしめる。

宮坂がベットに横になる。

クローゼットの扉を開けようとしたその時。

コン。コン。

ドアをノックする音が聞こえた。

宮坂 「はい」

ドアの方へ向かう

巻 「誰だ？生徒か？」

宮坂 「ほんとに来たんだ、冗談かと思ってた」

関口 「ほんとは冗談だったけど、俺はまだC組D組の宿泊のためにここにいなくちゃならないから寂しくなって」

宮坂 「もう・・・もし生徒が来たらどうするつもり？」

関口 「大丈夫だよ、小学生じゃあるまいし」

訪ねてきたのは関口だった。ベットに座り話合っている。

巻 「嘘だろ・・・まさか・・・あの2人・・・」

唇を噛み締める。さらに2人はキスをして倒れ込んだ。

ガラガラ！クローゼットの扉が勢いよく開く。

無言のまま巻はナイフを片手に襲いかかる。

クローゼットの音といきなり現れた人影に声も出ない。

関口が起き上った瞬間、喉元を一突きにされた。

血を噴き出しながらベットから落ちる。

宮坂 「きゃ……」

すぐさま宮坂の口を押さえ声が出ないようにする。

巻 「怖かったろ、もう大丈夫だ。これから2人の楽園を作るんだから」

微笑みかける巻。

巻 「声を出すなよ！こいつのようになるぞ！」

うなづく宮坂。手がどけられたがすぐに猿轡をされ手足をビニール紐で縛られた。

巻 「少しの我慢だからね」

宮坂を抱きかかえ巻がいたクローゼットの中に入れられた。

クローゼットを閉めて

巻 「2人の楽園に言うことを聞かないガキどもがたくさんいるなあ！あいつらナメやがって！俺の言うことを一つも聞きゃあしない。処分して当然だな」

そう言うと巻は部屋を出ていった。

初日 00:00:00 宮坂 真由美 宿舎ノ103号室クローゼット(前書

巻によってクローゼットに閉じ込められてしまった。
赤い光とサイレンの音が鳴り響く・・・

抱きかかえた死体を慈悲深く見つめる女。

女の口から血のような液体が溢れ出す。

その液体は関口の死体に注がれている。

宮坂 「何してるの？変になりそう・・・」

女は立ち上がり何もなかったかのように入ってきた窓から出て行く。

ハッと我に返る宮坂、なんとかこの状態から脱出しようともがくが固く縛られていてほどけない。

「お・・・おお・・・」

声が出たような気がした。クローゼットの間隙から部屋を覗く。

誰もいない、気のせいだったと思った瞬間。

死んでいるはずの関口が起き上った。

宮坂 「え！？なんで？ええ！？」

驚く宮坂。

関口 「見回り・・・に・・・いか・・・ては」

そう呟いて部屋を出て行った。

宮坂 「生きてたの？生き返った！？そんな事あるはずないし・・・
ああほんとに変になりそう」

クローゼット内を見回すとカバンがあることに気づいた。

宮坂 「そうだ、この中にカミソリが入ってたはず」

後ろ手に縛られた手で器用にカバンを開け、中から化粧ポーチを取り出す。

手探りでカミソリを探す。

「うわあああ！！！」

宮坂 「今のは巻先生の声？もしかして・・・とにかくここから早く出ないと」

カミソリらしき物に指が当たる。

宮坂 「これだ！」

カミソリの刃でビニール紐を切る。ビニールなので簡単に切れる。
手足の紐を切り、猿轡を外す。

宮坂 「ふっ・・・うっ・・・うう・・・グス・・・グス・・・」

今頃恐怖が襲ってきた。体を震わせ涙を拭う。

しばらく泣いていると頭痛がしてきた。脳内で映像が映りだす。

誰かが階段を上っている。

宮坂 「なんなの今の？幻覚？ほんとに頭がおかしくなったみたい」
目をつぶると同じ映像が映る。

すでに階段を上がりきって廊下に立っている。

宮坂 「ここは・・・宿舎の2階!？」

「関口先生！あの音は？いったい何があったんですか？」

宮坂 「え!？関口?この映像は関口先生の視覚・・・?」

映像は堀内の姿を映し出した。

宮坂 「堀内君!？」

堀内 「関口・・・先生?・・・ど、どうしたんですか?何が・・・」

関口 「部屋に・・・戻りな・・・さ・・・い・・・」

宮坂 「関口先生、生きてるの?でもなんか変」

関口 「規則・・・違反・・・者は・・・誰だ!!!うおおおお!!!」

襲いかかろうとするのに驚き目を開いた。

「うわあああ！！！！」

堀内の叫び声が聞こえる。

宮坂 「助けなきや」

クローゼットを開け立ち上がったが、立ちくらみをしてその場に座り込む。目をつぶるとまた映像が映りだした。

さつきとは違う映像のようだ、今度は廊下を歩いている。

宮坂 「次はなんなの？この廊下・・・1階？」

階段を横切り101・102・103号室の前で止まる。

宮坂 「この部屋に入ってくる」

意識を戻しすぐにクローゼットを閉める。

隙間から覗く、巻のようだ。

巻 「真由美・・・愛し・・・てる・・・よ・・・楽園・・・を・・・作・・・ろっ・・・ね・・・」

ブツブツ言いながら部屋をウロウロしている。

巻 「この日を・・・楽しみ・・・に・・・してただよ・・・クックッ・クック」

宮坂 「こいつ、おかしくなってる」

巻がクローゼットの前に来る。

「ハッ！！」声が出そうになったが手で塞いだ。

目の前にして異常さに気づいた。目や口から血のような液体が溢れ出ている。

巻がクローゼットに手をかけた。

その時。

「きゃあああああ！！！！」

どこからか女の悲鳴がする。

巻は声に反応して部屋から出て行く。

宮坂も気づかれないように後を追う。

「きゃあああああ！！！！」

また悲鳴が聞こえる。階段を上がる。

階段を上がりきるとそこにはドアをこじ開けようとしている関口とドアに体当たりをしている巻がいた。

目や口から血を溢れ出している関口を見てその場で座り込んでしまった。

宮坂 「やっぱり、やっぱり関口先生は・・・」

シヨックのあまりその場から動けなくなった宮坂を誰かが後ろから引っぱった。

「先生、こっち！こっち！」

引っぱるのは『北田 由佳里』だ、そのまま208号室に引きずられる。

208号室には北田 由佳里・浜口 亜希奈・佐々木 要・田中美穂がいた。

4人は宮坂を囲み

北田 「先生、なにかあったの？」

浜口 「堀内君なにかしたの？」

田中 「夏美がすごい悲鳴をあげてたよ」

佐々木 「先生なんで泣いてるの？」

4人は状況がわからず質問攻めにする。

宮坂は白目をむき気を失った。

4人 「先生！！先生！！」

前日 23:30:45 井上 葵 宿舎/206号室

前日 23:30:45 井上 葵 宿舎/206号室

ベッドに座り話し合う3人。四方田 夏美と井上 葵と酒田 結衣がいる。

酒田 「そうしたらさ、岸君が・・・」

井上 「結衣つて岸君のことよく出てくるよね」

酒田 「え！？そうかなあ」

井上 「もしかして岸君のこと・・・」

酒田 「そんなことない！ね、そうだよね！夏美」

夏美 「ん！？う、うん、そうだよ。何言ってるの葵は」

井上 「あ、夏美。他のこと考えてたでしょ。もしかして男？」

夏美 「違うよ！ユウ君はただの幼馴染みなんだから」

井上 「誰も堀内君って言ってないけど」

夏美 「えっ！？そ、そう。でもなんでもないよ」

井上 「あやし、あ、あ、私も恋したいな」

酒田 「葵は男子からも人気あるじゃん。この前だって『金井君』に告られたでしょ」

井上 「あんな腰巾着に告白されても全然うれしくもないよ！逆にマイナスよ！」

夏美 「ごめん！ちょっとトイレ行ってきていい？」

酒田 「うん、いいよ〜」

井上 「お化け出るかもよ」

夏美 「やめてよ、ちょっと行ってくるね」

夏美が部屋から出て行く。

酒田 「行っちゃったね、いいの？」

井上 「いいの、もうとっくの前にあきらめたんだから」

酒田 「キューピット役までして、そこまですなくてもよかったんじゃない・・・」

井上 「もういいじゃん。ベランダに出ていい」

酒田 「うん」

ベランダに出る井上、扉を閉め、ベランダの端に座り北ベランダの方へ耳を傾ける。

かすかに話し声が聞こえるが何を言っているのか聞き取れない。

井上 「夏美、よかったね」

涙が出そうなのをこらえるように空を見上げる。

厚い雲に覆われているようだ。

井上 「明日雨なのかな？」

その時、赤い光が照りつけた。

井上 「何この光？」

赤い光が消えていくのと同時にサイレンのような音が鳴り響く。

『ウウウウウウウウウウウウウウウウ~~~~』

サイレンの音と激しい頭痛に襲われる。

井上 「痛い・・・痛いよう・・・」

そのまま意識を失ってしまった。

「・・・」

「・・・ああ」

「・・・やあああ」

ベットとベットの間座りに座りドアを見ている。ドアノブがガタガタと音をたてている。

酒田 「いやあ！助けて！葵！助けて」

（夢？私ベランダにいたんじゃない？・・・？この声、結衣の声だ。）

ガタ！ガタ！ガタ！ガタ！

酒田 「やだ！いやあ」

（何で？怖がつてんの？何で私が結衣になってんの？）

ガタ！ガタ！ガシャン！！

ドアノブが壊れるような音がした。

ガチャ！

ドアが開く。壊れたのはカギだったようだ。

人が入ってくる。

酒田 「あ・・・ああ・・・」

（誰？関口先生？・・・！？何であんなに血を流してんの？）

関口 「うおお・・・」

部屋を見渡す。

酒田と視線が合う

関口 「うおおおおお！！！！」

酒田のもとへ近づいてくる。

酒田 「きゃあああああ！」

関口が掴みかかってきた。

井上 「結衣！逃げて！」

意識が戻り起き上がる、見渡すがベランダのようだ。

井上 「え！？夢？」

酒田 「いやあ・・・ああ・・・」

部屋から声が聞こえてくる。

井上 「結衣！夢じゃなかったの？」

ベランダの扉越しに中を覗く。

酒田が首を絞められている。

酒田 「う・・・うう・・・」

井上 「た、助けなきゃ」

扉に手をかける。だが手に力が入らない。全身が震えている。

井上 「なんで、力が入らない。助けなきゃ、助けにいかなきゃ」

ドス！ドス！

部屋から鈍い音が聞こえる。

酒田の頭を壁に打ちつけている。

血が壁に飛び散る。もう酒田に意識はないみたいだ。

グチャ！グチャ！

打ちつける音が変わる。

井上 「結衣・・・これは夢だよね、夢だよね」

井上はその場で倒れ意識を失った。

初日 01:08:31 鈴木 一真 宿舎/203号室

初日 01:08:31 鈴木 一真 宿舎/203号室

「先生！先生！起きて！ねえ、先生ってば！」

鈴木 「なんかさつきから向かいの女子の部屋うるさくないか？」

三好 「秋山も出て行ったきり帰ってこないし何かあったのかもよ」

鈴木 「ちよつと言いに行こうぜ、金井も行くか？」

金井 「俺はいいよ。」

2人は部屋を出て208号室のドアを叩く。誰も出てこない。

ドアノブに手をかける、鍵はかかっていない。

鈴木 「おい！お前らうるさいぞ！」

北田 「なによ、いきなり入ってこないでよ」

鈴木 「ノックしたけど誰も出てこないから入ったんだよ。それよりサイレンみたいな変な音鳴らしたり悲鳴あげたのお前らか？うるさくて寝れねーんだよ」

浜口 「違うよ！私たちがじゃないよ、私たちがなんだかわかんないんだから」

金井 「なに騒いでんだよ？」

鈴木の後ろから203号室に残っていた金井が顔をのぞかせる。

鈴木 「なんかよくわかんね、とりあえずこいつらつるせえんだよ！」

佐々木 「なにその言い方、ムカツク！」

田中 「もう出て行ってよ！変態！」

金井 「おい、あれ何だ？・・・関口・・・？」

鈴木の肩を引つ張り廊下の向こう側を指さす

鈴木 「関口だけど・・・なんかおかしくね？全身赤いし」

金井 「関口先生！そんな格好してどうしたんだ？」

廊下の向こう側にいる関口に聞こえるように大声で叫ぶ。

関口 「うわあああああ」

奇声をあげこちらに向かって走ってくる。

鈴木・金井 「うわああ！」

2人は驚きそのまま208号室に入りドアを閉めた。

鈴木 「なんだよあいつ！冗談にしてはひどすぎるぞ！」

北田 「どうしたの？」

金井 「関口がこっちに向かって走ってきたんだよ」

北田 「なんで走ってくるのよ」

金井 「しらねーよ、わけわかんねーよ！あいつ！」

ガチャガチャ！ドン！ドン！

鈴木 「やべーよ、あいつ頭どうにかなっちまったんじゃねえの？」

ガチャガチャガチャ！

金井 「このままだとこのドア壊れそうだな」

三好 「任せろ！」

巨体の三好がドアノブを押さえた。

三好 「ん・・・んん・・・すごい力だ！」

鈴木 「三好！頑張れ！」

宮坂 「・・・あ、あれ、ここは・・・。みんな・・・」

田中 「先生！気がついた！」

浜口 「先生！大丈夫？」

宮坂 「うん、ありがとう」

鈴木 「先生、関口のヤツどうしちまったんだよ、どう考えてもおかしいぜ！」

宮坂 「関口先生……。みんな！ここから逃げるのよ！」

佐々木 「逃げるって、どうやって？」

金井 「ここから飛び降りるしか・・・」

三好 「やばい！みんな早くしてくれ！あいつこんなに力があつたのか？」

北田 「そうだ！シートをくくってロープみたいにすれば」

金井 「それはいい考えだ」

鈴木 「みんな急げ！」

全員でシートを剥ぎ取り繋げていく。十分地面に着くくらいのながさになった。

浜口 「三好君が手を離したら関口先生がはいつてくるんじゃない・・・」

鈴木 「まだ鍵が壊れてないから三好が降りるまでもつたる。とにかく、女子から行け！」

女子達がシートをつたって降りる。

鈴木 「先生、先に行けよ」

宮坂 「私は最後に行きます！急いで！」

鈴木 「わかったよ！」

鈴木、金井も続く。

宮坂 「さあ、三好君！もういいわよ、急いで降りて」

ドアノブから手を放しベランダへ走る。三好がシートをつたって降りる。

ビリビリビリ！シートが破れちぎれてしまった。

北田 「ああ！シートが！これじゃあ先生降りれないよ」

「うおおおおお！」

宮坂が振り返る。ドアは開かれ関口が雄叫びをあげている。

宮坂 「もう・・・人じゃないのね、生徒達は・・・私が守る！」

宮坂に向かって走ってくる。

宮坂 「きゃあ！」

寸前で身をかわす、そのままベランダの壁にぶつかった。

関口 「うぐ……うがぁ」

よろめきながらも立ち上がる。

関口が立ち上がった瞬間

ガッン！

関口が倒れる、傍には握り拳大の石が転がっている。

鈴木 「先生！今のうちに」

北田 「さすが野球部！」

宮坂 「早くここから離れなさい！私はまだ残っている生徒を助けてから行きます」

佐々木 「そんな……先生、いつちゃやだ！」

宮坂 「いいから、行きなさい！」

そう言い残すと宮坂は部屋の中に消えていった」

初日 00:55:11 堀内 勇樹 宿舎／川原への道

初日 00:55:11 堀内 勇樹 宿舎／川原への道

夏美を支えながら歩く堀内。

夏美 「ごめんね、ユウ君」

堀内 「いいよ、とりあえず安全な場所まで行こう」

夏美 「先生達どうしちゃったんだろ？みんな無事かな？」

堀内 「わからない、何かあったにちがいない、じゃないとあんなに異常なことはいらないよ」

夏美 「・・・え！？うそでしょ？いや！！！」

堀内 「どうしたんだ？」

夏美 「結衣！逃げて！逃げて！」

堀内 「結衣？酒田さん？」

あたりを見渡す、酒田の姿は見えない

夏美 「いや！やめて！結衣！結衣！いやあ〜！」

夏美がくずれ落ちる。すかざず堀内が支える。

夏美 「うそでしょ・・・ゆいが・・・ゆいが・・・」

夏美は気を失ってしまった。

堀内 「くそ！ いったいどうなってるんだ！」

夏美を抱え歩きだす

前から人影が近づいてくる。

堀内が身構えた。

徐々にその姿がわかる

堀内 「秋山・・・？ 秋山か？」

秋山 「堀内？ なんで外にいるんだ？ その子は・・・四方田か？ お前ら何してんだ？」

堀内 「話せば長くなる、お前はなんでここに？」

秋山 「寝付けなくてその河原で素振りをしていたんだ、そして変な音がなって、そこから気を失っていたみたいなんだ」

堀内 「そうか、今は宿舎に帰らない方がいい、先生達がおかしくなってしまうんだ。」

秋山 「おかしくなった？ よくわからないが・・・」

「うわああああ！きやあああ！」

宿舎の方から悲鳴が聞こえる。

秋山 「まんざら嘘ではないみたいだな、俺は宿舎へ行く」

堀内 「危険だ！やめとけ」

秋山 「俺もお前と同じく守らなければならない人がいるんだ。」

堀内 「そうなのか……」

秋山 「お前は四方田と共にここから逃げるそこの川の向こうに県道があるから誰かが通るかもしれない」

堀内 「わかった……無事でな」

秋山 「ああ……じゃあな」

秋山は金属バットを持って宿舎へ向かった。

堀内 「みんな……無事ならいいが……」

初日 00:55:23 吉田 ミサ 宿舎/207号室

初日 00:55:23 吉田 ミサ 宿舎/207号室

ドン！ドン！ドン！

隣の部屋から何かを叩く音がする。

吉田 「何？さっきから何の音？何してるの？北島さん、山口さん、起きてる？」

2人からは返事がない。

ドン！ドン！ドン！

吉田 「どっしり、こわいよ」

しばらくすると音が鳴り止んだ。

今度は廊下の方で誰かの話し声がする。

吉田 「・・・何かあったのかなあ」

ドアを開け顔だけ覗かせる。208号室の前で人だかりができている。なぜかこつちを指さしている。

吉田 「鈴木君たち・・・？」

208号室前にいた金井が

金井 「関口先生！そんな格好してどうしたんだ？」

吉田 「関口先生・・・？」

関口 「うわあああああ」

後ろから雄叫びが聞こえる。

ダダダダ！

関口が208号室へ走って行く

「うわ〜」

208号室の前にいた男子は驚き部屋へ入る。

吉田 「先生なんで赤いの？」

関口は208号室のドアを開けようとしている。

怖くなってドアを閉めようとしたとき誰かがドアを開ける。

吉田 「え！？巻・・・？」

ドアを開けたのは目や口から血を流している巻だった。

吉田 「痛！！」

左手に痛みが走る。10センチほど切り傷がついており血がにじみだしてきた。

吉田 「いやー！いやあー！ー！」

後ずさりする、歩調を合わせるかのように巻が近づいてくる。

吉田 「こないでー！」

力なく声が出る。ベットにつまずき北島が寝ている上に倒れる。

北島 「痛い！なにすんのよー！」

吉田はベットから降り部屋の隅に向かう。

北島 「ちよっと！ミサ？何なの！う！・・・」

部屋の隅までたどり着いた吉田は振り返る。

ドス！ドス！ドス！

巻が北島に馬乗りになってメッタ刺しにしている。ナイフを振り上げるたびに血があたりに飛び散る。

吉田 「ああ・・・北島さん・・・」

山口 「うーん、どうしたの？何いそいそしてるの？」

山口が起き上る、隣の北島の異変に気づく。

山口 「いやああああ！」

その悲鳴に巻が反応する。

吉田 「ひいいい」

山口の喉にナイフが突き刺さる。山口の後ろにいる吉田からも喉を突き抜けたナイフが見える。

「先生！何やってるんですか！？」

廊下から誰かが声をかける。

山口からナイフを抜き取り声のした方へ振り向く。

血を吹き上げながら山口が仰向けに倒れる。

吉田に噴き出た血が降りかかる。

吉田 「山……口……さん……」

巻は廊下へ向かう。

ドアの所に人影が見える。

吉田 「佐伯君……？」

佐伯 「先生……どうしたんですか？……一体……何が……」

全身返り血を浴びナイフの先から血が滴っている。巻は笑みを浮か

べながら佐伯に近づく。

佐伯 「あ・・・ああ・・・」

佐伯は恐怖のあまり動けない、巻はもうすぐそこまできている。

佐伯 「うっ！！！！」

胸にナイフが突き刺さる。そのままうしろに下がり倒れる。

佐伯 「ガハッ！！ゴホ！ゴホ！」

大量の血を吐血する。胸の傷からは血がドクドクと流れ出ている。

「うわあああああ！」

廊下に倒れた佐伯と巻を見て101号室にいた岸が声を上げる。

岸 「な、なんだよこいつ！」

巻が掴みかかる。

岸 「木村！助けてくれ！」

岸は101号室にいる木村に助けを求めた。

木村 「ど、どうしたんだ？」

岸 「こいつを引き離してくれ！」

木村は巻の姿に恐れおののき、その場から動けない。

岸 「何してんだよ、早く……」

徐々に追い込まれていく。

岸 「うわあああ」

岸の首に噛みついた。歯が皮膚に食い込む。

岸 「あああ……」

グシャア！ビュウウウウ！

首の一部が食いちぎられ血が噴き出す。

岸はその場に倒れる。

巻は食いちぎった肉片をクチャクチャと噛みながら木村の方へ向かう。

木村 「あああ……うわあ」

木村は振り返ってベランダの方へ走りだしそのままベランダから飛び降りる。

巻も後を追って飛び降り木村を追って行った。

あまりの出来事にあっけにとられていた吉田が我に返る。

吉田 「に、逃げなきゃ」

足に力が入らず四つん這いで部屋から出る。

廊下には佐伯と岸の血で溢れている。

吉田 「何も見ない、何も見てない・・・」

自分に暗示をかけるように階段を降りた。

初日 01:18:47 秋山 孝司 宿舎／川原への道

初日 01:18:47 秋山 孝司 宿舎／川原への道

宿舎へと向かう秋山。宿舎に近づくにつれて何か異様なものを感じる。

秋山 「みんな無事だといいたが・・・由佳里・・・」

雨がポツポツと降り始めた。

秋山 「雨が・・・ん!?なんだ?」

向こうからもすごいスピードで誰かが走ってくる。

金属バットを身構える。

秋山 「止まれ!」

だんだん近づいてくる、止まる気配がない。

秋山 「木村・・・」

雨で視界が悪いが確かに木村がこちらに走ってくる。

秋山 「おい!どうした?」

木村はスピードを緩めることなく、そのまま秋山の前を通り過ぎ

ていく。

秋山 「なんだ？ いったい」

もう一人走ってくる。

秋山 「巻先生？」

巻も秋山の前を通り過ぎ木村の後を追うように走って行った。

秋山 「……やはり堀内の言ってることは嘘じゃないみたいだな」

2人の姿が見えなくなると秋山は宿舎へ向かった。

宿舎の玄関前に着いた。宿舎は消灯時間が過ぎているのに各部屋には明かりがついている。

秋山 「みんな、まだ中にいるのか……」

玄関の扉のガラス越しに人影が見える。秋山は玄関横の立木の陰に隠れた。

誰かが玄関から出てくる。

秋山 「……吉田？」

小声で呟いたつもりだったが吉田に聞こえてしまったようだ。

吉田 「誰!？」

秋山 「吉田、無事なのか？血まみれじゃないか？」

吉田 「秋山君・・・どうしてここに・・・」

秋山 「ずっと外にいて、今ここに帰ってきたところだ。それよりどこを怪我してるんだ？」

吉田 「うっ・・・うっう・・・」

泣き崩れる吉田。

吉田 「みんな・・・先生に殺されたの・・・ここにいたら殺されちゃうよ」

秋山 「みんなって、全員か？」

吉田 「わかんないよ！早くここから逃げよ」

秋山 「・・・少し中を見てくる」

吉田 「いや！一人にしないでよ！」

吉田は宿舎に入ろうとする秋山の腕をとり、宿舎に入らせないようにする。

秋山はあたりを見渡す。遠くに明かりが見える。

秋山 「あそこの明かりまで行こう、何かあるかもしれないし、ここよりは安全だろう」

吉田 「うん、早く行こう」

2人は遠くの明かりを目指して走って行った。

初日 01:32:22 宮坂 真由美 宿舎/208号室

初日 01:32:22 宮坂 真由美 宿舎/208号室

鈴木の投げた石が命中して倒れた関口の上をまたぎ部屋に入る。

部屋の中で振り返り倒れている関口を見る。

宮坂 「やっぱりもう関口先生じゃあないのね」

関口の変わり果てた姿を見て落胆する。

宮坂 「早く生徒達を助けなきゃ」

208号室から出る。

宮坂 「……!？」

廊下には佐伯と岸が倒れていて、あたりは血の海になっていた。

宮坂 「どうして……」

ゆっくりと倒れている2人に近づくと、階段を横切る時1階に何かの気配を感じたが、今はそれどころじゃない。

宮坂 「佐伯君!岸君!」

2人からは反応がない、血の足跡が101号室に続いている。10

1号室を覗くが誰もいなくベランダのドアが開いている。

「先生！宮坂先生！ここを開けてくれ！」

102号室の中から声がする。佐伯の死体でドアが開かないようだ。

宮坂 「みんな無事なの？」

佐伯の死体をどけてドアを開く。

102号室には西口 明、斎藤 純、兵頭 翼、松田 博の4人がいた。

宮坂 「ああ、よかった。」

部屋にいた4人は宮坂の足もとのおびただしい血にギョツとする。

兵頭 「何があつたんだよ、それ・・・血か!？」

宮坂 「・・・とりあえずみんな無事でよかった。他の部屋も見てくるわ」

松田 「行つても誰もいないぜ」

宮坂 「え!?!?どういうこと?」

松田 「他の部屋は外に逃げたか殺されたかのどっちかだ。今ここにいるのはここの4人と先生だけだ」

宮坂 「なんでわかるの?」

兵頭 「他人の視界が見れるらしいぜ、俺も少しは見れたが気持ち悪くなって長時間みれなかったけど」

宮坂 「そういえば私も誰かの視界を見た・・・」

松田 「つまり、ここにいるみんながなんかの要因で他人の視界を見ることが出来る能力を持ったっていうことだ」

宮坂 「松田君はその能力でみんなが襲われているのを見ていたのね」

松田 「そっだ」

宮坂 「どうして助けなかったの！」

松田 「助けたよ！ここにいる4人は、もし助けに行ったらとしても全員返り討ちにあってたよ」

宮坂 「・・・」

兵頭 「と、とりあえずここから出ないか？なんか気持ち悪いぜ」

斎藤 「出るってどこに？ここ以外に建物あんのか？」

西口 「あるぜ、少し遠いけど」

兵頭 「どこにあるんだ？」

西口 「ここから南西に方向に俺の親父の会社の農場がある。そこ

に建物があるし警備員もいるから安全だろう」

兵頭 「じゃあそこに行こう」

宮坂 「ええ、急ぎましょう」

兵頭 「お・・おい、何だあいつ・・・」

全員が兵頭の視線の先を見る、廊下に顔の右半分が潰れた血まみれの女が立っていた。

兵頭 「うわああ」

松田 「大きい声を出すな、まだこっちに気づいていない。あいつの視界に入らないようにみんな隠れる」

ベッドの裏や壁に張り付き隠れる。

女は佐伯の死体に口から液体を流し込んでいる。同じく岸にも同じことをしている。

松田 「先生、あいつに気づかれないようにドアを閉めてくれ」

宮坂はそつとドアを閉めた。

宮坂 「一体どういうことなの？」

松田 「わからない、といええ観察してみる」

兵頭 「観察って、おい！」

斎藤 「西口なにしてんだ？」

急に声をかけられた西口は驚き手に持っていたものを落とす。

斎藤 「何だよそれ・・・」

宮坂 「あなた・・・何持ってたんの!？」

西口が落としたものは拳銃だった。

西口 「俺も持ってきたくて持ってたんじゃないよ、親父が無理やり持たせたんだ！」

斎藤 「本物かそれ、もしかして使う気か？」

西口 「こんな状況じゃあしょうがないだろ！何人も殺されてんだぞ、自分を守るためだ」

松田 「女が207号室に入っていた、行くなら今だ！」

ドアを開き廊下へ出る。階段を降りて1階へ向かう。

西口 「うわああああ」

最後方にいた西口が悲鳴をあげる。

松田 「いつのまにか関口が復活していたのか」

パンパンパン！銃声が宿舎に響く。

関口 「う……う……」

銃弾を喰らった関口はその場に倒れた。

西口 「あ……撃っちまった……人を……撃っちまった」

松田 「早く逃げろ！さっきの女も気づいた！見つかる前にここから出る！」

宮坂 「行くわよ！」

呆然とする西口の手を取り1階へ降りる。そのまま宿舎から飛び出した。

兵頭 「おい！西口！しっかりしろ！どっちへ行けばいいんだ」

西口 「……こっちだ」

西口がふらふらと歩きだす。

しばらく歩いたところで

松田 「みんなすまないがここから俺と斎藤は別行動をとらせてもらおう。」

宮坂 「何言ってるの！」

松田 「すまないな先生、あいつらが何なのかを研究したくなつてね」

兵頭 「戻る気か！？殺されちまうぞ！」

松田 「みんな無事でな、行くぞ斎藤」

松田と斎藤は宿舎の方へ引き返して行った。

西口 「あんなやつらほっといて行くぞ」

西口は歩き出す。

兵頭 「先生・・・行きましょう」

初日 00:33:56 鈴木 一真 宿舎/外周

初日 01:33:56 鈴木 一真 宿舎/外周

鈴木 「やっぱり先生を助けに行こう」

佐々木 「何言ってるの、せっかく外へ出れたんだからここから逃げようよ」

田中 「そうだよ、先生も遠くに逃げたって言ってたじゃん」

金井 「ここでもめてどうするんだ、ほら、雨も降ってきたし俺は行くぞ！」

金井は歩きだす。佐々木と田中も後に続く。

北田 「鈴木君・・・どうするの？みんな行っちゃっよ」

三好 「とりあえず安全なところまで行こう、女子もいるし」

鈴木 「わかったよ！」

先を行っている金井を追いかける。

鈴木 「金井、どこへ向かっているんだ？」

金井 「わかんねえよ、とりあえずここから離れてんだよ」

北田 「あれ建物じゃない？」

北田の指さす方を見る。

暗闇に灯りが浮いているように見える。

金井 「街灯じゃないのか？」

鈴木 「とりあえず行ってみよう」

灯りに近づいてみるとそれは小さな小屋の入口の灯りだった。

鈴木 「物置みたいだな、鍵がかかっているしこの大きさだったらみんな入れないな」

金井 「向こうに建物らしきものがあるぞ」

小屋の向こう側に建物が見える、中に明かりがついている。

鈴木 「誰かいるかも」

近づいてみるとプレハブ小屋だった。入口には鍵がかかっている。

金井 「すみません！誰かませんか！」

扉を叩く。

しばらくすると中から人が出てきた。

男 「どうしたんだ？こんな夜中に、みんなずぶ濡れじゃないか

「とりあえず入りなさい」

中にいたのは施設管理人の島田 三郎だった。

鈴木 「管理人さん！助けてください、先生が・・・先生が襲ってきて・・・」

島田 「先生が？よく話がわからないな、サイレンの音やさっきの赤い服の女の人といい一体何があったんだい？」

鈴木 「赤い服の人？」

島田 「学校の関係者じゃないのか？ちょっと前に物音がして外を見て回ったら女の人が倒れていたんだ」

鈴木 「いや、そんな人知りません、地元の人じゃないんですか？」

島田 「ここには人は住んでいないよ、今この村にいるのは私と君たち学校の人だけだよ・・・まあいい、とりあえず何があったんだい？」

全員にタオルを渡しながら島田は話を聞く。

鈴木 「俺たちもよくわからないんです、先生が襲ってきてみんなここまで必死で逃げてきたんです」

島田 「そうか・・・よし、私が見に行つてあげよう。君たちは休んでなさい。私が使っている部屋ともう一つ部屋があるからそこを使いなさい。」

鈴木 「俺も行きます」

北田 「管理人さんも鈴木君もここにいてよ。怖いよ」

鈴木 「三好と金井がいるから大丈夫だ、な！」

三好 「あ、ああ・・・」

鈴木 「そ、そうだ。何か武器になるような物ありませんか？」

島田 「何物騒な事を言ってるんだ？正気か？あつたとしても君たちには危なすぎて渡せないよ」

鈴木 「お願いします！何か持っていたらみんなも安心すると思っ
んです！」

鈴木の必死の形相に気負いしたのか

島田 「わかったよ、すぐその小屋に農具など置いてあるから武器にはなるだろう。ついてきなさい」

鈴木 「ありがとうございます！」

島田 「うわぁ、ドシャ降りだな！」

島田と鈴木は雨がっぱを着て出て行く。

島田 「すごい雨だ、前が見えない位だ」

小屋に着き鍵を開け中に入る。

中には鋤や鍬、鉈、鎌などの農具が置いてある。

鈴木 「とりあえず持てるだけ持っていきます」

2人は両手いっぱい農具を持ち戻って行く。

三好 「おお、早かったな」

入口には心配そうに三好が待っていた。

鈴木 「人数分の武器は手に入った。女子は？」

三好 「隣の部屋に移ったよ。」

北田 「帰ってきたの」

北田が部屋から出てくる。

鈴木 「ああ、これなら女子でも使えるだろう。みんなに渡しといてくれ」

鉈と鎌を北田に渡す。

北田 「みんなもう寝ちゃったみたい。よっぽど疲れていたみたい」

鈴木 「お前も疲れてるだろう。後は俺らが交代で見張るから少しでも休んでろ」

北田 「うん・・・ありがとう」

北田は部屋に戻って行った。

島田 「君たちも休みなさい。この雨じゃあ宿舎には行けなさそうだから明日の朝に行くとしよう。私が起きとくから寝なさい」

鈴木 「すみません、ありがとうございます」

部屋に入るなり倒れるように眠りについた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5765f/>

SIREN : Extinct

2010年10月10日10時24分発行